

愛ちゃん

5月10日は母の日でしたが、この日に弘前に住んでいる叔母の葬儀がありました。子ども達、孫たちからの「大好きな母さん」「おばあちゃんへ」と、母の日の手紙が棺の中で眠る胸に置かれていました。私は前日から弘前に出かけ、葬儀の全てに参加して来ました。叔母の名前はアイですが、私の母が10歳年下の妹をいつも、「愛ちゃん、愛ちゃん」と呼んでいましたので、それに習って、叔母なのに、愛ちゃんと呼び続けて来ました。怪我をして、体が不自由になって21年間、末娘に介護を受けていました。5月末には2年ぶりにお見舞いに行こうと計画していた矢先の逝去の報でした。



母キヨ(14歳)、叔母アイ(4歳)

母が14歳、愛ちゃんが4歳の時に二人の母(私には祖母)が脳出血で突然亡くなりました。畳製造販売業を手広くしていた祖父は若い後添えを得て、今までどおり商売を続けて行きましたが、幼い愛ちゃんにはどんなに淋しい日々だったかと想像するのも辛いことです。母は女学生になっていましたし、先生方のご指導もあり、それなりに自分の人生を自分で掴んで行きました。継母に長男が生まれましたから、二人は早く嫁に行くべき人間でしかなかったと思います。

二人の実家は弘前市土手町(昔・目抜き通り)にあります。店舗、住居、坪庭、工場、住込みの弟子たちの部屋、小さな庭畑へと続く、間口は狭いものの裏通りまで長く伸びた町屋でした。祖父は東北3県の畳業界を仕切る力があつたようです。愛ちゃん20歳で終戦となり、女子挺身隊から戻るとすぐに祖父の弟子だった畳職人の一戸氏と結婚しました。この家に弟子に入って、様子をよく知っていた彼は、愛ちゃんが大事にされていない、貰いにいったら、すぐ呉れると思ったという事です。一戸氏にとっては愛ちゃんは一応

お嬢さんでしたので嬉しかったようです。実家はその時には余裕がなく、嫁入り支度も出来ず、世間体を憚って、一戸氏が、家具や着物などすべて用意して迎えたということで、驚きます。愛ちゃんを妻にすることで一戸氏の仕事に信用も増し、祖父の後を継ぐような気概も持てたのでしょうか。

愛ちゃんは写真のように丸顔でキリッとした可愛らしい感じで、背が高いところは母に似ています。働き者で、じっとしていることがありませんでした。テキパキと家事をこなし、食卓に豪華な手料理をたくさん並べてもてなしてくれました。これは私の母には真似のできないことでした。

夫の一戸氏は愛ちゃんをととても大事にして、愛ちゃんのこと全てを許して、自由にやりたい放題にさせていました。彼は口数が少なく、話しかけても、そっけなく返事をする、というか、返事をしたくないという感じでした。いつも早朝から起きて、働き通しでした。店舗兼工場と狭い次の間が彼の居場所でした。酒も飲まず、仕事のことしか頭にない、そんな感じでした。その上、乗り物嫌いで、よその町など行きません。外回りや付き合いは愛ちゃん任せでした。私たちが茶の間で食事する時も、おやつを食べる時も、彼は「どうぞ、どうぞ」と言って、逃げて行きます。愛ちゃんが一戸家の太陽のようで、また、大輪の花のようでした。今にして考えれば、彼は非常に昔気質の人物で、親方の娘を嫁にしても、弟子の気持ちのまま、夫になったのでしょうか。不思議な感じでした。

愛ちゃんは、私の母とは「何でも話した、二人の心は一つだ」と言っていました。母は実家について愚痴ることがありましたが、愛ちゃんが愚痴るのを聞いたことがありません。夫についても「よく働くよ」という言葉しか聞いていません。吹っ切れて、受容する人でした。身体障害者になっても、弱音を吐かないのが不思議でした。私の母と同じく、1男3女に恵まれ、89年の生涯を生き、自宅で眠っている間に亡くなりました。さようなら、愛ちゃん、今日は母の日ですよ。